

漢詩を味わう

第59回

けいりんそうざつえい
桂林莊雜詠

しよせいにしめす
示諸生
ひろせ
廣瀬
たんそう
淡窓

休道他郷多苦辛

道を休めよ
道を休めよ
他郷
苦辛多しと

同袍有友自相親

同袍
友有り
自ら相親しむ

柴扉暁出霜如雪

柴扉
暁に出づれば
霜
雪の如し

君汲川流我拾薪

君は川流を汲め
我は薪を拾わん

遠く故郷を離れて他郷の空に勉学する身には、辛いこと苦しいことも多いが、それを口にするには止めよう。

志を同じくする親友同士は、お互いに親しみ慰め励ましあって、学問修養につとめているのではないか。

暁に起きて、柴の扉を開いて出れば、霜が雪のように降りている。さあ、朝の自炊だ。君は川で水を汲んでこい。僕は林で薪を拾ってこよう。

《休道》 休は禁止。道は言うという意味。言いなさんな。

《同袍》 詩経にある言葉で、袍は綿入れの着物。同じ着物を一緒に着あうこと。

《柴扉》 柴の粗末な扉。枝折戸。

廣瀬淡窓は豊後国日田、現在の大分県日田の人で、商家を営んでいた廣瀬宗家第五世の長男として生まれました。七、八歳で「孝経」「四書」の素読を終えるという英才ぶり、九州各地に遊学しました。しかし、淡窓は病身で家業に堪えず次男に家督を譲り、自らは儒者として生涯学問をもって身を立てる決意をし、二十四歳で私塾「桂林莊」(のちに咸宜園と改めた)を開きました。

私塾の入門者は全国から集まり、延べ四千人を数えたと言われます。医者で蘭学者としても有名な高野長英や大村益次郎も塾生でした。江戸時代末期の当時、学問は武士のみを対象としましたが、淡窓は広く門戸を開放して階級無差別に人材を育成し、その組織的教育法は維新後の日本の学校制度の創設に多大な影響を与えました。廣瀬淡窓は晩年、長年の子弟教育の功績を認められ、幕府から士籍に列せられ、苗字帯刀を許されました。

この詩は、まだ塾の規模が小さかった桂林莊時代、塾生に示した詩です。単なる勉学の詩ではなく、共同生活をしながら勉強をする楽しみや喜びをうたうものです。勉学の場の厳しい雰囲気、寒い朝に皆が分担して炊事の支度という一コマでとらえています。川に水汲みに行くもの、薪を拾いに行くもの、厳しき辛さの中におのずから通い合う喜びがにじみ出ています。そして「柴扉」は学問をするのにふさわしい清貧の環境を想像させます。



廣瀬家に掲げられた家訓の「心高身低」の額

落日西嶺を衝み 驚沙北風を巻く 今年春已に半ばなるも 猶未だ帰らざるの鴻有り



《大意》西の峰に夕日がかかり、北風が吹いて砂を巻き上げる。今はすでに春も半ばだというのに、まだ帰らない雁を見かける。(朱彝尊詩・落日)

山晴れて春草発し 松老いて白雲多し



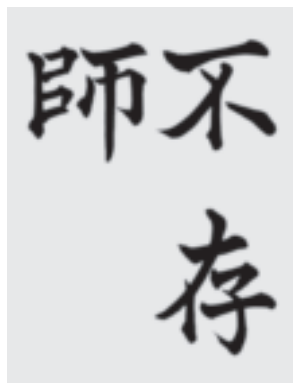
《大意》山は美しく晴れ渡って春草が萌え出で、松は多くの年を経て白雲がたなびく。

老松は万代不易を、白雲は清浄無垢を表す。(朱元詩句)

読み
大悟は師に存せず(だいて)
(大悟は師の教えによるものでなく、自己の力による。「従容録」)

大悟不
存師

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

存師 大悟不

存師 大悟不

次号課題

隸書

是道 平常心

存師 大悟不

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名
睦月(むつき)	如月(きさらぎ)	弥生(やよい)
卯月(うづき)	皐月(さつき)	水無月(みなづき)

和泉 溪石 先生書



佐藤 象雲 書

音

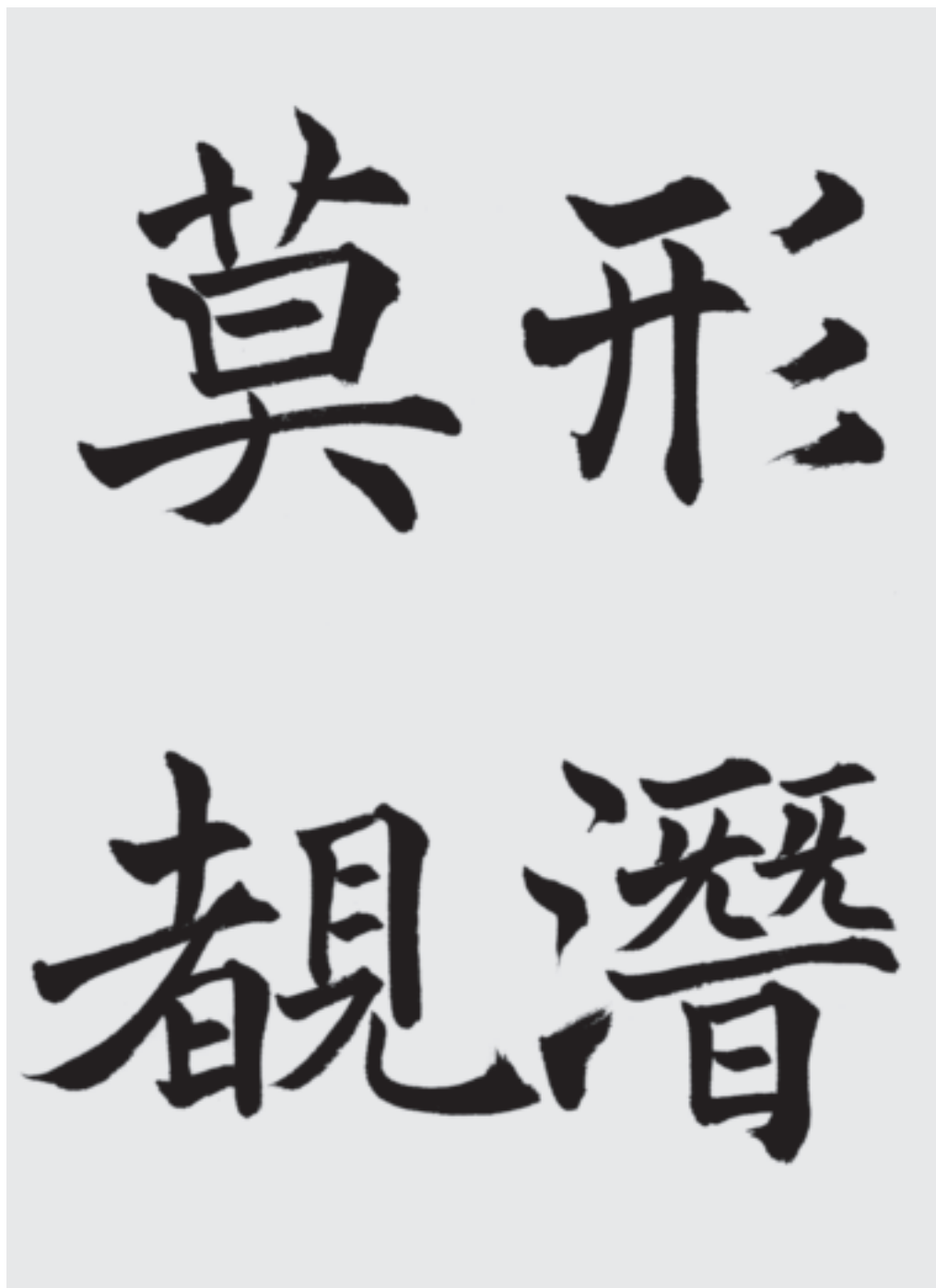
ソクタイキョウソウ
ハイカイセンチヨウ

略解

装束をつけた人はその容儀を飾り威厳を保つべき
立ち廻り、前後を視てのぞむ場合であっても。

形 潛 莫 覩

形の潜^{ひそ}んで観^みゆる莫^なきに……



象 雲 臨

褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西曆六五三年)の臨書(17)

『形潜莫覩』

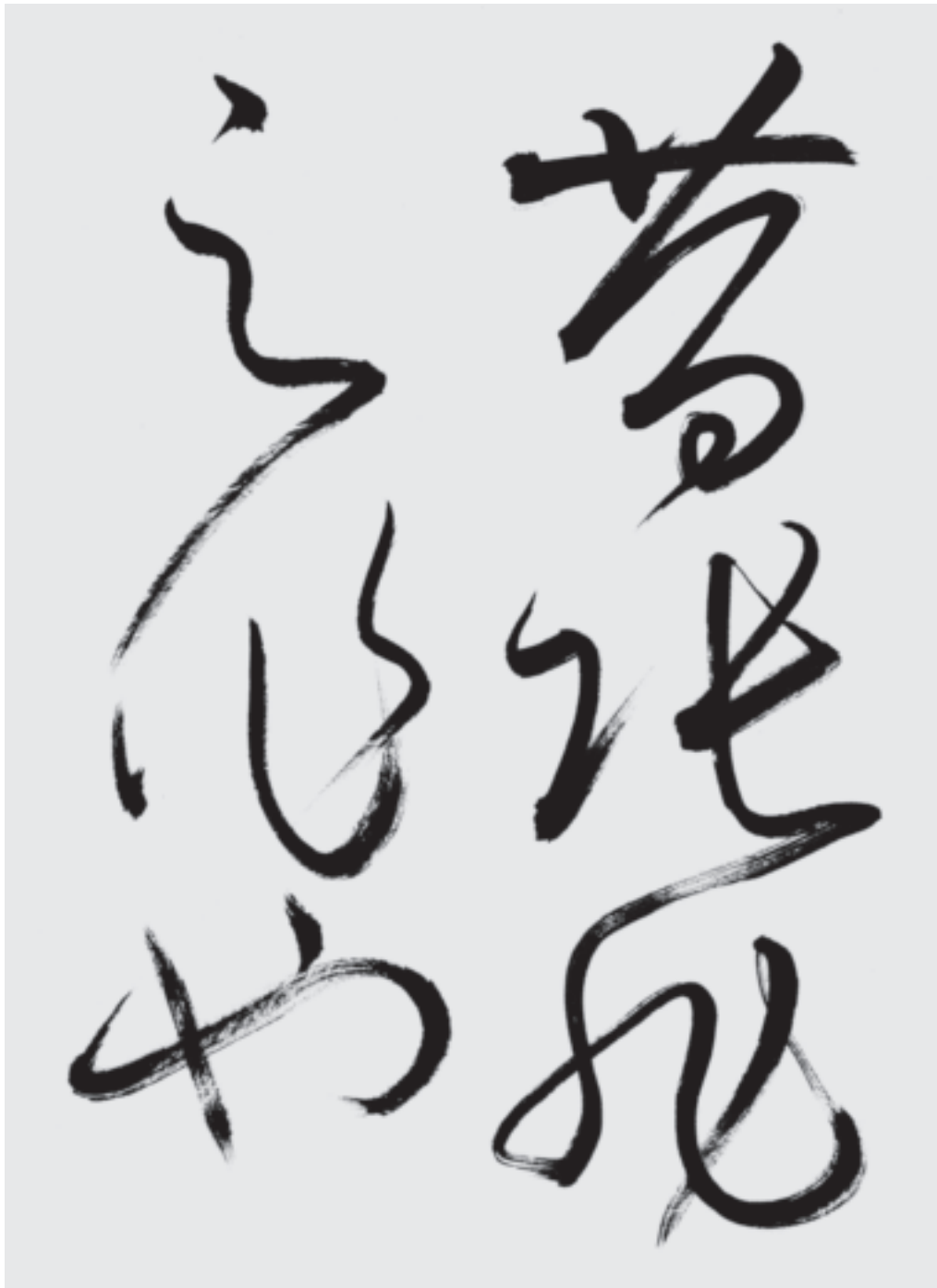
楷法の極則といわれる欧陽詢の九成宮醴泉銘は、一分の隙もなく窮屈と思えるくらい完成された楷書ですが、この褚遂良晩年の雁塔聖教序は懐が広く、屈託がなく余裕のある結構です。謹嚴の欧陽詢と寛綽の褚遂良は好対照を示しています。

形 起筆は紙に深く筆先をえぐり込んでいて、その筆のはね返りを活用して線が強靱。

潜 画数が多いため、概形は大きい。筆先を利かせて軽快に。

莫 各線の表情の豊かさを見逃さないよう。長い横画はしなやかで暢びやか。

覩 者の斜線に行意がある。横画の間架を揃え右上がりに、偏旁の底辺を揃えて安定させる。



昔、張旭の作る也……

懐素・自叙帖 (中唐・西暦七七八年) の臨書 (9)

象雲臨

『昔張旭之作也』

今月の書人傳では董其昌を取り上げましたが、狂草の本質をもっともよく理解したのが董其昌でした。明時代には長条幅が盛んに作られるようになり、その形式によく適合した狂草は多くの書人によって学ばれました。三ページに紹介した「行草書卷」の巻末部分は一見して懐素の自叙帖を学んだことが分かります。董其昌の「画禅室随筆」では再三懐素に触れられていますが、自叙帖の真蹟本は、項元汴のもとで董其昌も賞鑑しています。

帖や卷子など横物は行高が短いため、下方に随って文字が小さくなる場合が多いのですが、今月の一節は暢びやかで筆の動きが雄大です。一回の含墨で最後まで書いてみましよう。